

研究主題「特別支援教室での指導方法を踏まえた在籍学級での指導の工夫

－粘り強く学習に取り組む児童の育成を目指して－」

東京都教職員研修センター企画部企画課
西東京市立けやき小学校 主幹教諭 大島 典子

第1 研究のねらい

東京都特別支援教育推進計画（第二期）・第一次実施計画には、共生社会の実現に向け、障害のある児童の自立を目指し、一人一人の能力を最大限に伸ばし、社会に参加・貢献できる人間を育成することが示されている。また、東京都発達障害教育推進計画では東京都の小中学校で、通常の学級に在籍する発達障害と考えられる児童の在籍率は約6.1%とされている。

平成30年度には、東京都の全ての公立小中学校に特別支援教室が導入され、教員による巡回指導が行われている。特別支援教室に在籍する児童は、週1単位時間から8単位時間の授業において、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服することを目的とした自立活動の指導を受けている。特別支援教室で行う、障害の状態に応じた適切な指導の工夫についての先行研究は多いが、特別支援教室で学んだことを生かした在籍学級での指導の工夫についての先行研究は少なく、在籍学級の担任としては、どのような指導をしたらよいか悩む場面が多い。また、特別支援教室の巡回指導教員が巡回することにより、担任との連携を図る時間は増えてはいるが、特別支援教室と在籍学級との連携が十分とは言えない現状がある。

そこで、特別支援教室の指導方法を踏まえた在籍学級での指導の工夫を行いたいと考えた。そして、特別支援教室の指導方法を踏まえた在籍学級での工夫を通して、特別支援教室での指導を受けている児童を、粘り強く学習に取り組む児童へと育成することをねらいとした。

第2 研究仮説

特別支援教室の指導方法を踏まえた在籍学級での指導の工夫をすれば、児童が在籍学級でも粘り強く学習に取り組むことができるであろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究（特別支援教室や在籍学級における指導や支援に関連する先行研究）

本研究では、「最後まで集中して学習に取り組む」ことを「粘り強く」と捉えることにした。昨年度から観察している特別支援教室で指導を受けている児童が、言葉に関するつまずきがあること等から、特別支援教室の指導方法を踏まえた在籍学級での国語科の指導の工夫について研究することにした。

東京都発達障害教育推進計画（平成26年2月）を基に作成された『『読めた』『わかった』『できた』読み書きアセスメント活用&支援マニュアル』（平成29年3月）に、児童の読み書きの「つまずき」に対応した支援方法が分かりやすく掲載されている。さらに、他の先行研究から、漢字のつまずきの始まりが第2学年であることが多いことや、漢字の誤答の傾向から、つまずきを読み取ることができることが分かった。

また、個別指導計画については、東京都教育委員会が示している書式を基に、各区市町村で工夫して作成されていることが分かった。そこで、在籍学級と特別支援教室との連携を主眼とした個別指導計画のフォーマットを作成することで、作成に係る業務の効率化を図ることができると考えた。それにより、個別指導計画を基に担任と巡回指導教員で協議する時間の確保が

でき、指導の工夫について、共有を図ることができると考えた。

2 調査研究

(1) 調査の概要（平成 30 年 7 月に教員、平成 30 年 7 月・10 月に児童、共に質問紙法で実施）

都内公立小学校 1 校の第 2 学年 30 人の児童を対象に、漢字についての意識調査を行った。また、都内公立小学校 4 校の 80 人の特別支援教室や在籍学級の教員を対象に、個別指導計画、「つまずき」に対応した指導内容、教材・教具に関する意識調査を行い、特別支援教室や在籍学級における指導の工夫に対する意識等を明らかにした。

(2) 児童対象の調査結果

児童の意識調査では、「漢字の学習に粘り強く取り組んでいますか。」という質問項目に対し、「あまりできない」と回答した児童の割合は、学級全体の 10%であった。また、「だいたいできている」と回答した児童の割合は、学級全体の 27%であった。その中に、特別支援教室で指導を受けている児童も含まれていた。しかしながら、「だいたいできている」と回答した児童の漢字テストの平均は、全体の平均より 6.4 ポイント低く、漢字の定着に課題があることから、粘り強く取り組むための手だてが必要であると考えた。また、継続して粘り強く取り組むことができない理由として、「漢字の学習で楽しいとき」を「分からない」と回答した児童の割合が、学級全体の 40%であることも関連があると考えた。そこで、漢字の学習を通して「できた」、「分かった」という達成感を味わわせる授業を提案していくこととした。

(3) 教員対象の調査結果

特別支援教室や通級指導学級で指導を受けている児童への指導の方法について「自分の指導に満足していない」と答えた教員のうち、その理由の 50%が「指導の方法に不安があるから」と回答していた。さらに、「つまずき」を把握するための資料として、61%の教員が使用しているのが在籍学級や特別支援教室での学習状況で、25%の教員が使用しているのが個別指導計画であった。平成 29 年度の文部科学省の調査では、95.9%の公立小学校で作成されている個別指導計画であるが、「つまずき」の把握には、あまり活用されていないことが調査結果から分かった。その理由は、個別指導計画が連携を図るためのツールとしては毎時間確認するのが難しいと捉えられているからではないかと考えた。そこで、障害に起因する「つまずき」を把握でき、特別支援教室と在籍学級との連携の時間を確保することのできる個別指導計画を、特別支援教室との連携に主眼を置いて作成することとした。

3 開発研究

特別支援教室と在籍学級との連携をより深めるため、また、児童に「できた」、「分かった」という達成感を味わわせるため、以下の四つの開発研究を行った。

(1) 特別支援教室での学習を生かした「続けて学ぶスパイラル学習」の開発

特別支援教室での学習、在籍学級での学習を別々に積み重ねるのではなく、特別支援教室での学習と在籍学級での学習を関連させて積み重ねる「続けて学ぶスパイラル学習」を開発した（図 1）。特別支援教室と在籍学級とで関連する学習を取り上げ、連続した学びになるようにした。具体的には、年間指導計画の中にも、学習がどのようにつながっているかを矢印で表し、

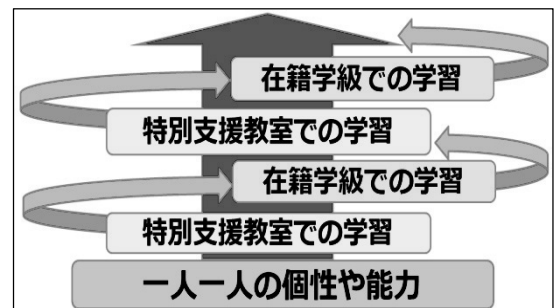


図 1 続けて学ぶスパイラル学習

「特別支援教室での指導方法を踏まえた在籍学級での指導の工夫
 —粘り強く学習に取り組む児童の育成を目指して—」

連続した学びになっていることを明記した（図2）。

さらに、特別支援教室や在籍学級での学習状況が一目で分かるような個別指導計画のフォーマットも作成した。データをリンクして、保護者への連絡ノートにもなるようなシートを作成し、一つのファイルでまとめたデータを開発した（図3）。

(2) 粘り強く学習に取り組むことができる授業モデルの開発

特別支援教室で行っているように、在籍学級でも1単位時間の中で複数の活動内容を設定した。個別学習・ペア学習・一斉学習といった学習形態を取り入れることで、集中力の持続が難しい児童にも、学習の見通しをもち、粘り強く学習に取り組むことができるようにした。（図4）。

(3) 補助具、座席の工夫等の学習環境の整備

書字を苦手とする児童に対し、特別支援教室で使用している補助具（板書のどの部分を書き写しているのかが分かるような枠等）を使用した。また、特別支援教室で指導を受けている児童の座席を前から2列目して、周りの児童の様子を見ながら学習できるようにした。

(4) フラッシュカードやワークシート等、教材・教具の工夫

ワークシートを使用することで、板書を視写する分量を少なくし、児童の負担を軽減した。また、特別支援教室で使用しているドリル等を参考に、読みのヒントになるよう、初めの一文字を記入した。さらに、1枚で1単位時間分の学習の流れが分かる内容となるように構成し、見通しをもって学習に取り組むことができるようにした（図5）。

4 検証授業（平成30年9・10月に実施）

都内公立小学校第2学年で「かん字の読み方」の検証授業を行い、授業前後での児童の意識の変容や研究仮説を検証し、成果物の有効性の把握を行った。

第一に、特別支援教室と在籍学級の双方で関連した学習を取り上げ、連続した学びになるようにしたことで、特別支援教室で指導を受けている児童は、どちらの場においても意欲的に学習に臨むことができた。本研究の検証授業では、在籍学級で活用するフラッシュカードを作成する際に、特別支援教室で把握した特別支援教室で指導を受けている児童の苦手な学習内容を取り入れ、教材提示の方法の工夫を行った。それにより、特別支援教室で指導を受けている児



図2 「続けて学ぶスパイラル学習」を生かした指導計画

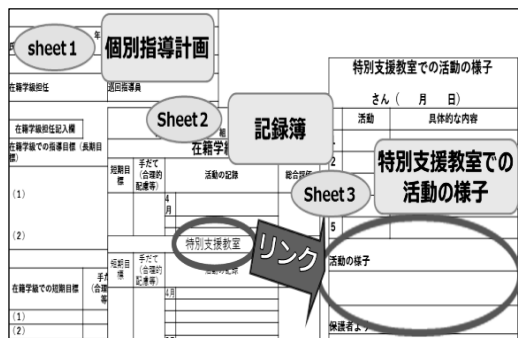


図3 特別支援教室と在籍学級の連携に主眼を置いた個別指導計画

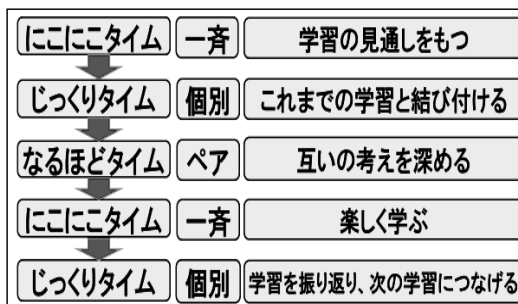


図4 粘り強く学習に取り組むことができる授業モデル

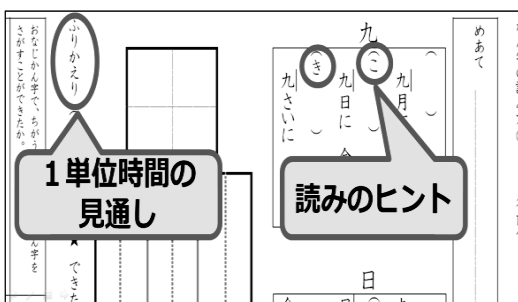


図5 フラッシュカードやワークシート等、教材・教具の工夫

児童は、在籍学級の一斉指導においても集中して学習に取り組むことができた。また、特別支援教室で指導を受けている児童が在籍学級で作成した漢字クイズを特別支援教室の友達に出題する際に、自信をもって学習の成果を発揮する様子が見られた。

この「続けて学ぶスパイラル学習」のメリットは、在籍学級の教員が、特別支援教室で把握している「つまずき」を理解した上で指導できること、特別支援教室で在籍学級での学習内容の確実な定着を図れることである。これらのメリットは、本研究で開発した「特別支援教室と在籍学級の連携に主眼を置いた個別指導計画」を活用することにより、短時間で「つまずき」の把握や学習状況の共有ができるので、より効果的となることが分かった。

また、「粘り強く学習に取り組むことができる授業モデル」を開発したことにより、全ての児童が授業の流れを理解し、最後まで集中して学習に取り組むことができていた。さらに、書字が苦手な児童に対して補助具を準備することで、ワークシートにめあてを書く時間が短くなり、より学習のねらいに迫ることができた。

第二に、児童の意識調査では、「漢字の学習に粘り強く取り組んでいますか。」という質問項目に対し、検証授業後には「いつもできる」は7ポイント上昇し、「あまりできない」は10ポイント減少した(図6)。「まったくできない」と回答した児童については、ワークシートの振り返りで、第1時に「クイズ作りが難しかった。」

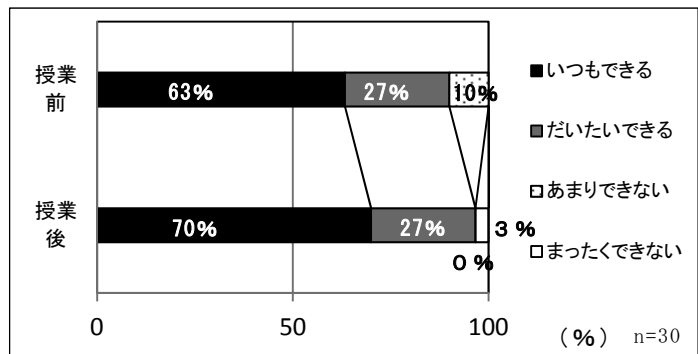


図6 「漢字の学習に粘り強く取り組んでいますか。」という質問項目に対する授業前後の児童の調査結果

と記入していたが、第2時以降は達成感を味わうことができたことを記述していた。また、授業前に「だいたいできている」と回答した児童についての授業後の漢字テストでは、平均が全体の平均と等しくなり、向上していた。さらに、漢字の学習で楽しかったこととして、授業前には「分からない」と回答した児童が40%いたが、授業後には0%となった。フラッシュカードの問題を考へることや漢字のクイズを作ること等、学習自体の楽しさを挙げている児童が増え、達成感を味わうことができていた。このように、これらの開発研究は、特別支援教室で指導を受けている児童のみならず、在籍学級の他の児童にも有効な手だてであることが分かった。

第4 研究の成果

開発研究により、どの児童も粘り強く学習に取り組むことができた。特に、特別支援教室で指導を受けている児童にとって、特別支援教室と在籍学級とで関連する学習を取り上げ、連続した学びになるようにする指導の工夫が効果的であった。また、座席の工夫等の環境整備により、他の授業においても、以前より粘り強く学習に取り組む様子が見られた。これらのことから、特別支援教室の指導方法を踏まえた在籍学級での指導の工夫をすることで、児童が在籍学級でも粘り強く学習に取り組むことができたと考える。

第5 今後の課題

開発した個別指導計画を他校でも使用して、その有効性をより一般化する必要がある。また、成果物として、第2学年の学習指導案、ワークシート、フラッシュカード、国語科年間指導計画案を作成したが、他の学年のもの開発にも取り組んでいく。